

個性あふれる 図書館づくり

～札幌市の新しい図書館～



道都として発展を続ける札幌市。近年、札幌市にはターゲットを明確にした、個性あふれる図書館が誕生しています。2016年11月に開館した「札幌市えほん図書館」と、2018年10月に開館した「札幌市図書・情報館」に行ってきました。

声を出して本を読めるえほん図書館



白石区複合庁舎 6 階にあるえほん図書館

2016年11月に新しくできた白石区複合庁舎の6階に開館した「札幌市えほん図書館」(以下、えほん図書館)。ターゲットを未就学児に絞り、乳幼児の読書のきっかけづくり

を創出する、絵本に特化した図書館です。

札幌市では平成17年に「札幌市子どもの読書活動推進計画」を策定し、子どもが自主的に読書を楽しむ環境づくりや図書館サービスの充実を図ってきました。しかし、その中で課題も浮き彫りになっていました。例えば、静寂性を求める図書館の壁です。小さな子ども連れで図書館に行っても周囲の人たちに遠慮しながら本を読んだり、探したりしなければいけません。また、予算面でもこれまでの図書館では幅広い市民を対象にしたサービスを提供しなければならないため、子ども

向けの図書購入費に制限があります。サービス面でも子どもを専門としたスタッフの研修や知識の習得にさける時間は多くありません。

札幌市の姉妹都市である韓国^{テジョン}の大田広域市では、庁舎内に子ども図書館があり、そこを札幌市の訪問団が視察したことは、えほん図書館開館に向けて大きな弾みになりました。大田広域市が行政庁舎に子ども図書館を入館させた背景には、単に教育のためだけでなく、子どものころから庁舎を訪問する機会をつくり、行政に親しんでもらうという狙いもあったそうです。また、白石区役所移転に当たっては、地元から庁舎内ににぎわいのある空間を望む声があり、こうした結果を踏まえてえほん図書館の開設に踏み切ったのです。

えほん図書館の最大の特徴は、保護者が声を出して読み聞かせをしたり、子どもたちが声を出して本を読んでも構わないということ。未就学児を対象にしているので、これまでのような静寂性を求める図書館とは一線を画し、保護者と子どもたちのニーズや利用しやすさを第一に考えた結果です。



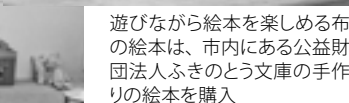
乳児を寝かせながら本が選べる赤ちゃん向けの本がそろうコーナー



奥にある広々としたカーペット敷きのスペースは読み聞かせコーナーとして活用



遊びながら絵本を楽しめる布の絵本は、市内にある公益財団法人ふきのとう文庫の手作りの絵本を購入



カーペット敷きの遊べるスペースの横にはソファを配置

書棚に沿ってカーペットが敷いてあるコーナーは乳児向けの絵本がそろい、保護者が子どもを寝かせたまま本を探せるようになっています。奥にもカーペットを敷いたコーナーがあり、紙芝居やバリアフリー絵本として布の絵本や手話付き絵本、拡大写本（大きな字の絵本）が並んでいます。その横にはおもちゃで遊べるコーナーやソファも配置しており、親子でくつろげるエリアが設けられています。

また、子どもが自ら本を選べるように低い書棚を採用し、表紙が見えるように本を配置しています。中でも通称「ジャ



めくりながら本を選べるジャケット架

ケット架」と呼ばれているカラフルな可動式の絵本箱は、レコード店でジャケットをめくって選ぶ「ジャケット買い」のように、絵本をめくりながら選ぶ楽しみを演出しています。

蔵書管理ではICタグを導入し、自動貸出機を2台

設置。操作が簡単のため、子どもたちが自分で操作をする姿も見受けられ、貸出の約6割が自動貸出機の利用によるものです。これは待ち時間の解消とスタッフの省力化にもつながっています。



絵本にICタグが装着されているので、置くだけで貸出手続きができる自動貸出機

期待されるデジタル化対応とプログラミング事業

えほん図書館のもう一つの役割が、子どもたちの読書活動をサポートする人たちを支援することです。そのため館内には「おひさまのへや」と名付けられた体験型活動室に隣接して「おつきさまのへや」を設置し、ボランティアなどの活動室として利用しています。

これらの部屋を活用して精力的に行っているのが、おはなし会やワークショップ、各種講座などの事業です。

毎週水曜日は登録ボランティアによるおはなし会を開催。また、えほん図書館の司書が担当するおはなし会は毎週木曜日に0歳、火曜日に1、2歳、毎月第4土曜日に3歳以上と、年齢別に開催しています。毎月第2日曜日に実施している「図書館デビュー」は、図書館に初めてやってくる子どもたちを対象に、音楽演奏や演劇などを交えたエンターテインメントあふれる読み聞かせて好評を博しています。このほか、図書館入り口前のガラス面でのお絵描きワークショップやしかけ絵本ワークショップなど、体験しながら楽しめる事業ワークショップを展開しています。また、絵本講座として絵本編集者や絵本作家を招いた大人向けの行事も行っています。

中でも特徴的なのが、デジタル絵本ワークショップ

(絵本をテーマにデジタル機器を活用した体験型ワークショップ)といったICT時代に対応した事業です。2020年に小学校でプログラミング教育が必修化されることもあり、小さなころから気軽に絵本をテーマにデジタル機器やプログラミングに触れる機会を創出しています。2018年11月には、各種体験ブースを回ってもらう「プログラミングまつり」を開催しましたが、親子で400人以上が詰めかけ、大盛況になりました。

また、2019年1月20日には「デジタル絵本づくり」が開催され、子どもたちがデジタル絵本創作アプリ「ピッケのつくるえほん」をタブレットで操作して、オリジナルの絵本づくりを楽しみました。プログラミングを含むデジタル関連の体験型ワークショップは需要が高く、今後の展開に期待が高まります。



2019年1月20日開催されたデジタル絵本づくり。タブレットを駆使してオリジナル絵本づくりを体験した

2017年度のえほん図書館の来館者数は約18万7千人。来館者からは「子どもが絵本を楽しめるようになった」「遊べる場所や声を出しやすい空間がとても利用しやすい」「子どもを連れて図書館に出かける機会が増えた」などの声が聞かれ、来館者アンケートによると9割以上が満足感を示しています。「静寂性を求めなかったことで、子どもを連れて図書館に行きやすくなったことが、えほん図書館の一つの成果だと思いま

す。お互いに迷惑がかからないように意識して利用していただいています」と池田章宏館長は言います。

市内中心部の好立地を生かした図書・情報館

「はたらくをらくにする。働くことは素敵なことです。いろいろな人に出会えたり、新しいことを覚えたり、そのうえ、お金ももらえるのですから。とはいえ、本当に私にできるんだろうかと不安になったり、家族に心配ごとがあったりもしますよね。そんなとき、支えになりたいと私たちは考えています。『はたらくをらくにする』。それを私たちは目指しています」



2階に掲げられた図書・情報館のコンセプト

札幌市図書・情報館(以下、図書・情報館)の2階の入り口を入ると、こんな言葉が飛び込んできます。これがまさしく図書・情報館のコンセプト。働く人たちをターゲットの中心に据えて、図書をはじめ必要な情報を提供する新しい図書館です。

図書・情報館は、札幌市中央区北1条西1丁目に竣工した「さっぽろ創世スクエア」の1、2階にあります。この建物にはオフィスのほか、札幌文化芸術劇場^{ヒタル}、札幌文化芸術交流センター^{スカーツ}SCARTSなどが入居しており、札幌の新たなまちづくりをリードするプロジェクトの一環で誕生しました。

館内は「WORK(仕事)」と「LIFE(暮らし)」、そしてさっぽろ創世スクエアの文化施設との関連性を踏

まえて「ART（アート）」という3つのテーマで図書を収集し、情報を発信しています。

札幌・北海道の魅力を発信する役目も

1階は300㎡という広さの制約もあり、図書を1,000冊程度に抑え、セミナーも開催できる開放的な空間です。また、市外の観光客やビジネス客の来館も見込んで、札幌や北海道の魅力を発信する場としての機能を盛り込んでいます。札幌や北海道の図書や雑誌が配架されているほか、壁には150インチを超える大型デジタルサイネージ「SAPPORO WINDOW」が配置され、札幌・北海道の魅力を伝える映像を発信しています。

中でも興味深いのが、札幌市のオープンデータを活用して映像化した「SAPPORO KNOWLEDGE TREE」。市内の図書館の貸出データなどを活用したアート作品に仕上がっていて、図書館ならではのコンテンツです。

また、隣接スペースにはカフェや札幌文化芸術交流センターのオープンなイベントスペース（SCARTSコート）があります。図書をカフェに持ち込んで読書ができるほか、SCARTSコートを活用したイベント開催に



広々とした1階。奥の壁にあるのが大型デジタルサイネージ「SAPPORO WINDOW」

合わせて館内展示を行うなど、周囲の施設と連携しながら、札幌の新しい街の顔としての期待が寄せられています。

ビジネスを情報面から支援

図書の多くが配架されているのが2階です。1階の3倍の広さがありますが、スペースを有効活用するために三角形の空間をうまく配置しています。

仕事や働くことに関するさまざまな図書、専門的な資料も収集し、働く人たちを情報面からサポートすることは、図書・情報館の一つの大きな狙いです。

入り口を進むと目に飛び込んでくるのが、「リサーチカウンター」です。ここは、司書2名が常駐し、情報を探すサポートをしてくれる、いわゆるレファレンスカウンターです。業界動向や著作権に関する判例など、専門的な情報を探すことにも対応してくれる、心強い存在です。また、リサーチカウンターの奥にあるデータベース検索エリアには10台のパソコンが配置され、新聞や辞典、雑誌や論文、自治体法務、官報、経営情報や企業情報、マーケティングなど、通常は有料でなければ利用できないデータベースも網羅しています。



さまざまな資料探しに対応してくれるリサーチカウンター

リサーチカウンターの奥が「WORK」エリア。図書・情報館では日本十進分類法にこだわらずに本を配置していて、ここには起業や企業・経営情報、資格やスキルアップ、ビジネス書などが置かれています。また、「会話が弾むコツ」などコミュニケーションに関連した図書

も並んでいます。これには開館前に周囲1.5kmで実施したアンケートの結果が生かされています。ビジネス実務のジャンルで希望する本の回答が多かったのが、ビジネスマナーや職場の人間関係などに関する図書だったのです。働くことの中でコミュニケーションが大きな要素になっていることを痛感し、あえてこのエリアに配置したそうです。また、新聞は業界の専門紙を含めて90紙もそろっています。中には「全国きのこ新聞」など、こんな専門紙もあるのかと驚くような新聞もあります。



90紙がそろった新聞コーナー

図書・情報館を利用した札幌市で自営業を営む男性は「難しい仕事を依頼されて悩んでいたとき、リサーチカウンターのスタッフに相談したら、経済雑誌の検索で参考になる記事を探し出してくれた。本当に助かった」と言います。

図書・情報館の大きな特徴は、最新の情報を伝えるためにあえて貸し出しをしないこと。新刊は予約が殺到し、多くの人が見ることができる機会が少ないという経験から、館内のみで閲覧してもらう仕組みにしたのです。

また、2階には予約できる座席やミーティングルーム、複数人で仕事の打ち合わせができるグループエリアがあります。打ち合わせをしながら調べ物ができた

り、エリアによっては会話ができるなど、これまで市内の図書館にはなかった新しい利用形態になっていて、図書館のイメージを変えていくことになりそうです。

ICT活用で、図書館のアウトプットを増やす

館内には「WORK」のほか、医療・健康、法律、福祉、介護などの本が並ぶ「LIFE」、写真集やデザイン、音楽、映像などの本をそろえた「ART」のエリアがあります。

書棚を見ていくと、ところどころに赤い縁でくくられた枠があります。これは通称“ハコニワ”と呼ばれているコーナーです。「お金をもらうためだけに働けない私たち」など、あるテーマから広がる読書の世界を提案しているもので、書棚の1コーナーを企画展やフェアのように構成しています。

「今まではインプットに注力してきましたが、これからの図書館に必要なことはアウトプットだと思っています。この“ハコニワ”もそうですが、書棚を自分たちが編集するという思いで一人の司書が一つの棚を担当しています」と言うのは、図書・情報館館長の浅野隆夫さん。蔵書や座席の管理などはできるだけICT（情報通信技術）を導入し、そこで省力化された時間を選書や“ハコニワ”づくりなど、司書的能力を生かして、



書棚の1枠を赤枠でくくった“ハコニワ”コーナー

図書館の発信力を強化していくために確保しているのです。

「ビジネスで大切なことは情報交換。ここはその交流拠点です。交流は会議室でもできますが、そこに図書館の力が加わると、より豊かで深いものになっていくはず」と、知の拠点である図書館をビジネスでもっと活用してもらい、札幌市の産業発展につなげていくという狙いが感じられます。

札幌市電子図書館の蓄積

えほん図書館や図書・情報館の開館以前にも札幌市では先進的な取り組みをしていました。それが「札幌市電子図書館」（以下、電子図書館）です。

札幌市中央図書館が中心になって、2011年度に電子図書館の実証実験を行い、電子書籍を読む端末機器のニーズ調査、市内の出版社の協力を得て商用出版物の電子化、地域資料などの電子化を進めました。翌2012年度には本格実施を想定してシステムの開発仕様やコンテンツ調達策などを検討し、2013年度には図書館の電算システムの再構築を行っています。

そして2014年春には札幌市中央図書館の1階に「デジタル本の森」コーナーを設置し、館内に限って電子書籍を公開、秋からは電子書籍の貸出サービスを開始しました。事前に貸出券を作り、市内の図書館で仮パスワードを発行してもらい、メールアドレスなどを登録すれば、「札幌市電子図書館」のサイトから貸出手続きをするだけでデジタル絵本や小説、雑誌、「広報さっぽろ」や郷土資料など約8,000冊をパソコンやスマートフォンで閲覧できるようになっています。

札幌市の電子図書館はデジタル化に対応する図書館の取り組みとして全国的に注目されました。それを手がけたのが浅野さんでした。「以前から図書館は、無料貸本屋と批判され、出版社や書店と距離ができて

いました。でも、みんな本に関わっている人たちです。また、紙から電子に媒体が変化していく中で、図書館がそこに対応していく必要があると思いました」と当時を振り返ります。その経験は、図書・情報館での積極的なICTの導入につながっていきます。

また、電子図書館での蓄積は、えほん図書館の運営にも生かされています。2011年度の実証実験では、中西出版(株)や(株)亜細亜西社など、札幌市内の16出版社が200冊の書籍を提供し、これを図書館が電子化して実験に利用しました。2012年度には出版社とともに契約ルールの検討や課題などを検討しています。そして、2013年度には北海道や札幌に関する電子書籍の一元的な調達窓口として、一般社団法人北海道デジタル出版推進協会（通称HOPPA、代表理事林下英二）が設立されています。出版社と図書館が連携して電子書籍の普及や周知に取り組むことができるようになったほか、図書館と協力しながら地域に埋もれている良質なコンテンツの発掘を目指した活動を進めています。このつながりが、えほん図書館のプログラミング体験やデジタル絵本づくりの事業に結び付いているのです。

電子図書館をはじめ、えほん図書館、図書・情報館など個性的な図書館づくりは、人口190万人超の札幌市だからこそできる取り組みです。札幌市の魅力の一つに、発信力ある図書館の存在が加わったといえるでしょう。また、これらの図書館の活動によって得られる経験には、道内のほかのまちの図書館に生かすことができる貴重な知見が詰まっているはずです。新しい時代の要請に、地域の図書館が応えていく先導的な役割を担っていくことが期待されます。